井蛙抄　六巻　頓阿著

巻一より巻五までは、歌の風体・本歌取・制詞・異国同名の名所・同類のことに分け、先人の諸説を引用集成して作歌の心得を説く。巻六は歌壇の逸話・故事などを集む

杉山文庫

井蛙抄第一

杉山文庫

風体事

新撰髄脳云（四条大納言公任撰之）凡平は心ゆくとゝろきよけて打ゝなだらかなるをすぐれたりとゝ色ゝことゝ新しくそへくるをそよこたるとゝろきなり一もちゆ深すくとゝろへし姿心あるをもとゝるまかくいまつ心をとゝる色ゝそのすがたをいはうちきゝすけまをゆ色あらはゝ心をとゝきゝとゝ心はめつらしくうえ

佐山文庫

かしこき時也しかれは人おほく哥枕とさせて
よろこひはれりし心はせなんありける事文言凡詞
いましめをあまりおほくかなるよしなれと取に
ならすとふるきことはのよみならはしみたりに古く
よめることも栄えを嬉しまことに俳名いふかゝる
後頼口傳に云大方哥よみの心といふは心はえよくと
してめつらしき節をもとめ詞をかさりよむ
なきなりたゝ姿あまたになるも詞のつゝきは由あるへしてから
おもひてはめてたしとも見えねと調のなからむ

はやり歌なとかかれはよしともさためて記
媚しあまたとも以あるらん詞なきさは又よ縁し
まことにわりしさは一乃事とすへし是れ
とをしきさん云は世の中をなかは古き事の
思ひへりくは金葉集といふ乃撰あまたその集もの
哥の世なきなりてしまる所なるまされを
頃世なんして何にせよ誹諧歌へおよはれ
古来風躰抄云哥乃よみ事とないんとすれは八雲
大納言云金葉は集の集とかうけたる道後

郷乃侍拾遺乃序ハ
ものしたるもふるくなられるあきとの
らんしも錦ぬいのもとくちもうつ
ものさくらこあけもつ
あかつなく艶ものあれもいとはるる事の
あるなかへしもとうわ歌学といひてこゝろよ
ばくさそもあくもきこゆ物なりわ
詠哥大概 従進挽井 云ハ
をとゝ乃ハまつよ海さるもとめて見とゝむ

こゝろ葉ゝ物ゝるとゝ
集とゝつ海ゝ風体ハ
不論古今遠近
とゝ海ゝ文云ハ
伊勢物かゝり後撰拾遺世六人集中にあと
よとゝ乃ゝ
忠峯伊勢小町ハ乃ゝ
あゝとゝ
ばねゝとゝ

こめて用海へしもとゝ三代
敏躰先達之秀歌
海ゝ古
ゝ海ゝ
ゝ人麿貫之
ゝ乃ゝ
ゝ海ゝ
ゝ海ゝ

つら通世し延和元年に帥となりし只ありたまひて跡
とゞむ心と古風にそめて詞を先達にならひて
世まれ人の縁を結ふ業成
新撰髄脳云以前よりの人の歌
世中渡りかねてそへん駒の足をさきゆく駒の絵見て渡
あまの原ふりさけみれは春日なるみかさの山に出し月かも
貫之歌極まる法乃上に延喜今人の世をいはは人の命なれ
貫之 平
おりひとつ見てわゆきをみての教は河風もしらすなりけり

三浦のうら
わか宿の花みんとてそくるにくる人我をみん縁そ忘れかるへき
かね盛 平
かくまゝハよみ男のはまる年月を送りむなしく打忘たりけん
此哥ハ貫之か云平城中の古き跡をえ人しらすとそいはれ
櫻津の此おもしろき摂しつくるる今ハよろ名残おもひ人ん
是ハ伊勢乃家を取の中務君によみてかきつかはれけ
みやうに哥よ紀といひ有る
忘をしてみれし川よせし三そ程といひけれとも如何にくる

老八深書文ら文ハ補よりへたる方也ゆゑ
ゝ平ハよりむへさとりてこそ
後成ゝ卿西園寺歌合の判ゝ方ハ歌学をぬる
ゐく法師の方ハ具とはてゝ以ゝ也ゝ此の
多とさ海くゝよわゆるとへゝるゆゝよハあゝる
海ゝ平ゝよんあ学うちあゝむるゝ者わゆく
おほえくゝわゝくゝを少なるすゝなんあら
つゝあゝへゝ在中将乃月やあゝぬとゝこ紀貫之く
ゝつくゝよゆゝるとゝいひをゝたゝやうなるへ

京極殿を右府将軍おゝ近世乃人ゝたゝおゝひ
えゝる風情と世一宇ゝ云ゝくゝんまをゝたと
ゝてゝゝに源乃おゝむゝと三ゝ源氏にゝわ
て世ゝを方の方ハ人ハ更ゝのくゝ乃ゝけと云
高人への解衣をゝさけるゝゝゝゝゝゝれを大納言
経信ゝ後頼朝ゝ方京ゝ更ゝ頭補清盛卿ゝ方く
ハゝ文ゝ則ゝのみゝちゝとゝゝ伝わ者る基後と
ゝけゝる人ゝゝれゝを加ゝ末乃ゝのいやゝきゝする
とゝゝのまゝてゝゝよゝふゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人くれ思ひ入るくまくれなるをかへるゝ代ゝにもをを
かゝるそや侍らん

大納言経信

ゆふされは門田の稲葉おとつれて芦のまろやに秋風そ吹
君か代はつきしとそ云羅風やみえてかはのまゝん頂
奥津風吹よ弟しと行言の枕の西門をあしよ白波

俊頼朝臣

山ふかく晴よしはかわ谷のむかふみやかるゝ花は白雲
おち瀧津やそうち川のまかせに岩もと波いちせの数かゝ

是はしまの秀歌の本躰とや人申つゝや
韓なくまのへ白かく西風に尾花すゝきる秋の夕暮
あるていたらお葉に門まてのなる枯風そ吹
是は幽玄（ゆうげん）に面影すゝにきもしきはなすもま
おほもまん野狂の玉川なまて遠なる浪よ月宿るなれ
思草はおもよもひ白絹の寄まくまてもよみぞなきて
是は面白見ぬおもしく上手のまことみ姿
うき宿人を袖を出ひてちなき也時としのゝめ梅を
是ある嫡く詞のよ海こそてまるとそ云つ

さかくれ淑まさらしき姿なるを

影輔卿

かつらきや高間乃山の桜花雲井のよそに見てや過なむ

秋風よ千里か外く雲絶て空わたる月の影のさやけさ

高砂の尾上乃松に吹風乃音にのみやハきゝわたるへき

清輔朝臣

冬枯乃森のくち葉の霜の上に落たる月の影のさやけさ

君まさてけふりたえにし塩かまのうらさひしくも見えわたる哉

難波人あしたく火乃下こかれいつまてか思ひこかれむ

古へハ文武の道やたゝのこれなるとかゝれ今ハ忘しよ

先人　俊成子

またや見んかたのゝみのゝ桜かり花の雪ちる春の明ほの

世中よ道こそなけれ思ひ入山の奥にも鹿そ鳴なる

住わひて身をかくすへき山里にあまりくまなき夜半の月哉

立かへり又もきて見ん松島やをしまのとまや波にあらすな

思ひきやしちのはしかきかきつめて百夜も同しまろねせんとは

基俊

あさて来といひし萩原に福ていも忘しらよにつらしれ

契り給ひ一さしをうたふ義とあるてあるべしとは此詞にあり

八雲抄云第一つよ音はやくいたくうえん

なるべきなり拍子ひようをいたくうえん

ていはりわく艶なるけ者こえんるをとと

もれを必ずあるべしとすきをえ又

艶なるべきなり也ようんをすいをもとたり

かよひもへしをあるべしこのひへかり所

同古抄云さをあるべきまとくいはゆ

あるべしかるあまとあるべしをこなすべき也

昔よりよんたる和歌をいるべきいるべ

つさあるべしをよりわくめらしきまま

よりくるけたるべかるまてもくるけるる

ん上句とすべしをあるべ上下ともをくれる

句也よりもあくるけるる秀句をまる

きりの次

又云後とは奥義の肝心をくるべ

なるべしせんとする也勢へ他のやうとぬへる

京極殿送衣笠殿よ云まの門方にて和國の風にて
作るを人々を先掛をくれくかさをけるを掛りを
面さしを掛あそれよりむべ山まとをうを見て
作分者ふのうにをそをうきを掛おきと云事
よみつきを優よなを作たをそ作るをそれ
よををうわやさしきを花をはよあをやうの掛
とおそ為しけよあんいなふれせんを作むむ
掛もこれ十様の中よりは何も四のるやうをと

さて平さんなをとうねとをすをうを掛をしをを
て思ひえかをしのをを作るをかをを作をすをいを作やく
ゆをきをれへをしをくくをとすをまをてその一
境よいわ者てをそをれをもをを作ををまを
作をされいをうをき今をを平ををふ四の者を
きをのをそをめ作あをわを又ぬをくの作ふをん
とで掛ちをくをは入かのををわをとく堅
固なをあををを方ふえをれぬを四るををを者
ををををみをくををきをすをを作るはををひを

しるしたまはすて行くゑ者くゝ歌あれ
ものさてしこ
私云心あるとゝ稀よくゝ心ゆ物ものゝ事也近日
乃人風情めつらしく奥あるて者くゝ者
ふあるとおもへ事さしたゝくゝ事也風雲
草木の感ゝ世間盛衰ゝ也故戸部中さ
ゝて思ひへゝ心あるゝ故中也故戸部中さ
きゝ美ゝ物ゝ稀ゝ風乃ゝ風情物
しゝくめてたゝれゝ也ある事とゝ

中さ次遍昭僧正出家ゝ仏ゝ
たゝゝ心ゝれゝて也ゝ
ゝんとなすてゝゝ
なゝゝゝれきゝ
とゝ物ゝ
ゝ

六百番歌合　餘寒

左　持

季經ゝ

ゝ

右

中宮權大夫

きてしかへりきたるを見て侍りしかば
右方中云た平初文字より題をかれあるをいれ
ぬ色なりたる陳云物又多字より題
不揃仲右方中云非弥判云はあるべし歌ぶ
優よりそ乃ん侍るめまたかうさい迷来乃ぶよ
乃肖姿詠さまてるりまるさ侍り偏曲折微妙
の風情不面ろく所に非弥の中しをなりしく象
不被其心事しかや但たのうこ重ねをくれて

とのへ乃御ぶすすこ初りしくや侍りんとかんえ
侍まとあ白ろ侍るるや時頁乃ぶ乾
廣田社平合　速懐

さ　賀家

昔よりあくこ乃ろ田の社あるこ林ぶ心をあるん

太　登蓮

いつまてらの垂ぶ社とあるこはあくもる月日光
左ぶめくこひろ田乃あといへ乃心あるあまるみく侍
乃中よ林乃心ぶよ社せられ侍るへんとれる

夕こそ侍るめれ宣旨将軍字佐秋心上の人詩歌
ゐたるべしたゝ歌をとりてめ文ゝ
歌を加へられとも詞つきはすくるゆえ
くゝくこそ侍るべしたゝ侍る歌とも
先詞文ゝ偏質ゐ甚稚かゝて見ひとつ
乃すくるゆ侍るべしたゝ侍るとも秋のとの
ゐひあくれはゆくゝ侍はるゝくゝ侍月日
なるゝんとゝめ侍風稚ようゐゝ又移移
ゝる

西行御裳濯河寄合
なゝゐあゝ花乃歌ゝゐ山乃澤ゝゐかゝる品を
判云たゝ寄ゝゐて侍ゝゝけるゝみ花たて
ゝもたるゝうゝ侍ゝやゝゝん
同寄合
花ゐゝむ心花いゝてゐゝわゝんゝて異ゝ泥とゝ義ゝに
判云たゝ寄ゝゐゝ侍ゝゝ但たゝ寄ゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
同寄合

吉野山やりておもしとおもふまとおもふなかれとへやおもひん

判云すくれたることもなくよろしく持とやいふへからん

同歌合

左
わさぬかれ庭の木葉をとはまて月ハ見るやとこそ人まつ

右
山川よりもわれか住ともめにむかすかなとの上哉

判云たかひにこともなく是をゆきとたかに持すへし

これもよろしとて為し

私云わか河合ふ小冊六番歌合にもおもしともなくてよろ

しとこそ三所よかれて侍る判ちん本之家

よて侍るへし

順徳院御百首

またわもぬハふくらもあき梅と志かてもわしめ常れくお

やうにやまくらにゆしゆんおしくさわ侍りけ

そてを三代集以上乃歌ハ此撰されしとこそつまさ

わくるしくぬて筆かくなし乃へり

かくしあまハおられぬ段もかまへわらにの夜風雲乃さうま

五句体新造風情おもしろく雑もにしく花貝か

こゝしてあひもおもへりて世三所山乃峯のよこ雲

又白世一定し恵秀歌を撰ばれ侍りし
人々の名書とどめはべりしかこれハ八月十五夜の秋の月
歌世一字又毎字雖押韻藏源作者云云
中務の親王又意三百首より
春日山とかすみしあけぬれば雲乃あなたよ白山の雪
毎日毎麗しかくこそあらまほしく
雲もまた四方風もつゆはらはぬ春の雪やまやかよいの月の影
さらかやうよ屋すかしかしかしてそこそこ
なるへ

蕭流撰者初度撰ぶ時自歌を撰入し給ふ
ぞ記録なこと千なる不一風神本様乃あるよ出
千載集よりは撰歌い初ハ十一首迎勅定よりて
世又そと加ぶ世ハそこ十一首ハ故言云なるへ
きかよ注ぶ　皇太后宮大夫俊成
みのしの花乃ちらわとそこ
名残ハ聖人の秋風身よ三ぶ吹
月さ白沙水のとるあられ
浦はこ極へのこまや吹わ花

あられるはまるさるはいわれ露なく神よ波ろうきそわ
思ひさやさちはしらかきこるはめて百衆も同一九〇きんとは
角はあらしはいろ乃道芝夜姉ゝいりくぬんもすはまくきこ
あまるまに男はさくもはへきとよくとそんはそせしお
恒まるて男とかくとへき山里よあまわく海を作らの屋
ちこはは乃きこそちはよさりまこ〇花ハくすは思ひ物
りらくよ姉わある男とも結はは雲ハさわとも袁ちるん

新古今事稿千八自余撰者再ある叡慮ら入ら、
百帖自撰仍新勅撰千一首出ら

權中納言定家

名をとゝめ雪は雪とふる山梅戸の明かはやそら
久方はつゝよかくるあ雲ま之ゆりよくるあるん
天の原ゆ人ハかくはるとも物ゆ梅ゝそ月のひかり也れ
行年ハ又秋乃ゆくとも也めゆ千ゆくゝ月はゆきのゝハ
きくれつゝ神ゝにかくあ秋の日よはゝそみむろの山深ゝめ
ちりとも世ゝ袁よすれるはゝ年はは大袁ゝのゝ次さくゝハ
打ゆ振と殘也乃なゝ袁ゝ川ゝ
ゝ乃めゆ五はをこふれそ手へあるゆゝ逢世のゝはよゝに

おもへばまつ川の浦の夕暮さへ風にやまかぬ声も哀れに
くる夜の浜は浦士が焼火とられみよなはの八橋も越て来
名を車は男子乃夜あられとまれ都のみやこ哀れそめん
これも此あり王乃くりきこのごとくにこそ哀れく聞とおもひとこそか
三のへとやまてぬ昔の旅とて何しお出ても又ばかりの月ぞけ
おもひ浦まるる民のつまさみゝの河ぎ袖かてひきくも命と冬は
百年乃との恋を出るとひくしまるあまはむすよ山の端の月

續後撰　前大納言為家

明わたる衣の山の桜よの霜よ雪と記めしかくれ白雪

あさみどり咲けばしめくんはなしの乃まさへほのき山ぞくらぶ
天河と浪さわがしよ成よるはなかみるの法
龍田山よそに紅葉の色にこそ時雨ぬ松の名もかくしけき
花紅葉もあへとまくる時雨に見よ西山の紅葉はぬきと秋の夜ぞ夜
いすゞ川神代のかけ乃紅葉とめて今もくもらぬ姫の月
乃ゆめゆく三輪乃杉村すわゆかりきや神代乃声くまかん
老らくれ物や乃みるまと祈りし我おもまして神やまもらん
道まての乃まもそ君に成まつる年月なるき袖の袖かへて
なのましかこひまむかうかひくの世にゆきそて君にみせなん

みちのくのしまうたの路ハ白河の関をそてゆく人かたよりそ絶まし

續拾遺

前大納言為氏

はるかなる藻はさしとそとまりて雲ゐの人よ旅ね山の端

よしの山くもゐの花やさかりぬらん尾上の鐘を雲にまかへて

まつの雲の峯もとまりて山のはの小さくてかゝる尾鉄

いつしかしも秋の林の紅葉まする色をかへて此かな

かゝやと沢風のうつろひゆく月てたよりすむる秋の川なり

次庵のうしや実の花を立波と風よ吹こし秋の境の坊

霜路の花の枝くての楊梨文付てかゝ庵さしむ林の山の勢

お葉との秋乃花の形なくこれとのこるなるらし乃風

待まる夜乃嵐のらちを遠くそめてあくるまでにつまる白雪

餘情

忠峯十体云餘情(よせい)体

我宿のむめのたちえやみえつらん思ひのほかに君かきませる

今こんといひしはかりに長月の有明乃月を待出つる哉

おもひのほかの紅葉の色のよわの嵐にむとこふみるらし也

吉野川岸の山吹く花と激け見人の心ちしもせうつか

和田のはら八十嶋かけて漕出ぬと人にハ告よ海士乃釣舟

四条大納言公任卿 和歌十九首

上〻 言葉たへすして詠まりこころ深くあるなり

月のくまなきあき夜に海ゆく舟をそこよ

まさしと云ふこころわるやこ音無の山もあてとなれこ西もん

上中 言葉こころ〻くあまりのこころ深くあるなり

春山のいあ〻れ花もしをれ山もる海さ沢乃つ〻多分にそれ

おなじ乃雲の清あるようけみして今やひとんを月の弱

月音社歌合奥書云五条 後成卿 おほるおれ〻

と云ふこの理をいのむこさるむとせされとを本しわ

御手とのおもてきまるとあけるこ歌まをうらいなら

めるなるもいのとうるく勢ゆのを幽玄ようをきこゆるや

乃あるなるへ〻よ沢ふようをもめきこそのこと

も深れあるよ新氣乃うひるるやうちるまを乃

あるるやたとへも書れ花のあるわ歌たかり

よ秋れ月のまへよ鹿乃弾ときこかこ乃梅り

言風よ沢む業乃ゆ紫よきこれのうちう沢と

まるやうなるるゆ弾うひるそこ乃遊ぶよ

ゆ〻やうるハ作きと月やあらぬ春やむ〻れと

いひむかしの名残をしのぶにあはなるこの人の行と
ゆくめてくゆゆるゆるやうなるすまひ朝と
ゆくみあせんとをりへの面かいちりに世をはるるとき
まるるとはちりきとしのものるこの人て行わと
六百番歌合　残暑

右

信て

秋の夕ぬれはるけは夜ハ秋はてくゆきハ秋の上風
判云右ハ為経情うる神仏なすへて言葉
千五百番歌

右

有家朝臣
きくれはの夕ぬるるの袖の露上乃松の煙ゆ殺てて
京極黄門判云右哥殺有餘情可謂哥殺
事

根物之